

調査・研修等計画届出書

令和 5年 10月 3日

瀬戸市議会議長 様

議員名 長江 秀幸

政務活動 として、下記のとおり調査・研修等を実施いたします。

記

期 日	令和 5年10月11日から10月13日まで（2泊3日）	
調査先・研修名	第85回 全国都市問題会議	
会場名（会場所在地）	八戸市公会堂・公会堂文化ホール	
調査・研修の目的 （今回の調査・研修に係る瀬戸市・自己の現状と課題を踏まえて）	今回のテーマは、「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」ということである。本市は、文化芸術・スポーツともに活動は盛んにおこなわれている。一方では、各施設の老朽化という問題も浮き彫りになっている。明るいニュースといえば、朝日インテック・ラブリッジ名古屋のサッカーグラウンドが、本市に建設されるということである。テーマにもあるように、文化芸術・スポーツは、都市の魅力の向上や持続的発展に欠かすことのできない要素となっている。今回の研修で、本市においてどのような方策ができるのか考えていきたい。	
議長名の依頼	要・ <input checked="" type="checkbox"/> 不要	依頼先（名称）
同行者名	池田信子、三宅 聡	

※行程表を添付してください。

調査・研修等報告書

令和 5年11月 2日

瀬戸市議会議長 様

議員名 長江 秀幸

政務活動として、下記のとおり調査・研修等を実施したので報告します。

記

期 日	令和 5年10月11日から10月13日まで（2泊3日）
調査先・研修名	第85回 全国都市問題会議
会場名（会場所在地）	八戸公会堂・公会堂文化ホール
調査・研修の目的 （今回の調査・研修に係る瀬戸市・自己の現状と課題を踏まえて）	今回のテーマは、「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」ということである。本市は、文化芸術・スポーツともに活動は盛んに行われている。一方では、各施設の老朽化という問題も浮き彫りになっている。明るいニュースといえば、朝日インテック・ラブリッジ名古屋のサッカーグラウンドが、本市に建設されるということである。テーマにもあるように、文化芸術・スポーツは、都市の魅力の向上や持続的発展に欠かすことのできない要素となっている。今回の研修で、本市においてどのような方策ができるのか考えていきたい。
調査先の事業の現状・課題 / 研修で学んだこと・キーワード等	
文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展	
基調講演	
アートの役割って何だろう？	
東京藝術大学長 アーティスト 日比野克彦	
アートは生きる力	
・アートに欠かせないもの⇒想像力	
アートは多様性の指針	
・アート⇒多様性ある社会を築く基盤	

アートはこころに作用する

- ・アート⇒社会的な課題に対して持続的に対して持続的に取り組み続けていくには大切なもの

あらためて・・・・・・アートっていったい何だろう

- ・私たちが日常の中で自己を見つめたり、人と接したり、社会を変えたいという気持ちになったときに、いつもそこにはアートが必要
- ・様々な社会的課題⇒アートの特性を活用
- ・1人1人の小さいけれども、確実にある、少しずつ異なった多様な想いが、時代を変化させていく

主報告

八戸市の文化・スポーツによるまちづくり

青森県八戸市長 熊谷雄一

背景と取り組み

- ・「はちのへ文化のまちづくりプラン～八戸市文化芸術推進基本計画～」 「八戸市スポーツ推進計画」を定めている
- ・2011年、新たな交流と創造の拠点「はっち」が開館⇒地域資源の魅力創出・発信し、文化芸術、産業、観光、市民活動、子育て支援といった各施策を一体化した施設
- ・「八戸ブックセンター」、八戸まちなか広場「マチニワ」、八戸市美術館と、目的や役割が異なり、市民等の多様なニーズに応えられる文化施設を公共交通網の整備と併せながら、歩いて回遊できるエリアに順次整備⇒単なる貸館に留まらない企画事業を市民と共に展開
- ・文化施設の周辺において再開発事業等への連鎖につながった⇒公共文化への投資が、民間による都市機能再編への投資を呼び込んだ
- ・スケートは八戸の風土が育んだ文化
- ・長根リンク（2019年2月、約50年の歴史を閉じる）⇒同年、YSアリーナ八戸がオープン⇒2020年フラット八戸の整備⇒氷都八戸パワーアッププロジェクト⇒足元の競技人口の裾野を広げることに継続的に取り組む
- ・地元サッカーチーム「ヴァンラーレ八戸FC」は、J3リーグ所属チームとして活動⇒避難ビル機能を備えたサッカー専用スタジアムを市が整備できたのは、市民を巻き込んだ民間ベースによる力強い活動があつたこと

- ・アイスホッケーのアジアリーグに所属する「東北フリーブレイズ」、バスケットボールBリーグ所属の「青森ワッツ」、スリー・エックス・スリー・ドット・エグゼプレミア所属の「八戸ダイム」を合わせた、4種目もプロスポーツチーム⇒地元関係機関と八戸スポーツコミッションを立ち上げ、その活動を支援⇒子どもたちや指導者の育成プログラムの実施など、「する」「みる」「ささえる」スポーツの各シーンにおいて、市民による多様な関わり、楽しみや活躍、学びの場を提供

文化の力、スポーツの力

- ・ブックセンター⇒書店機能を持つ「本のまち八戸」の拠点施設⇒「本を読む人を増やす、本を書く人を増やす、本でまちを盛り上げる」を運営の基本指針屋⇒売れ筋を中心とした棚づくり⇒地方の書店では配架されにくい書籍を中心に、購入して読むことができる環境を用意⇒考えること、心豊かになること、人材を育てることにつながるの思い
- ・ブックセンターの取り組みや⇒全国の個性的な書店から講師を招く⇒書店員の学びと情報交換の機会、「本のまち八戸ブックフェス」を共同で実施、地元有缘のある作家や本を「パワープッシュ作家」として、地域の書店が共に盛り上げる取り組みを実施⇒「地元民間書店」という地域資源を活かす
- ・プロスポーツチームによるスクールや独自の競技会の開催⇒チームが活動拠点を構え、地元企業や地域とのパートナーシップを育むことを通して実現
- ・居場所をつくる⇒社会と関われる⇒まちづくりに関与できる⇒多様な選択肢がある地域社会づくりを目指していくことが必要⇒文化・スポーツはそのためのシーズを大いに提供
- ・たとえ定住人口が減ったとしても、活動を通して地域づくりに主体的に関わる人、すなわち地域づくりの当事者が増えれば、まちは豊かになる

今後の展望はパブリックな場をつくること

- ・八戸美術館⇒「ジャイアントルーム」というユニークな提案が設計プロポーザルで評価⇒市民参加型のさまざまな活動を行う場所、美術とは異なるジャンルのモノやコトを受容し、出会う場、「美術」に特化しない曖昧な場所
- ・文化とスポーツは、元来、内に閉じるのではなく、他社と交わり外へと開いていく性質を持つものであり、どのようなまちづくりにはピッタリ

一般報告

まちづくりの活力は地域に根ざした文化政策から育まれる

文化事業ディレクター 演出家 吉川由美

まちのリノベーションと「はっち」の誕生

- ・「はっち」が開館する前から以下の3点を柱に、プロジェクトを立案。
 - ① 中心市街地を関心空間にする
 - ② フラットなコミュニケーションの場を創る
 - ③ 地域資源の価値をみんなで見出す

「ハッチ」のアートプロジェクト

- ・まちを再生する市民力をブーストするには、市民が自分事として参加できる、分野を横断し壁を揺さぶるようなアートプロジェクトが必要だと考え、地域に根ざしたテーマを探し、アーティストのみなさん、市職員・コーディネーターたちとプロジェクトを進めた⇒アーティストたちは、「はっち」の最上階のレジデンスに滞在しながら、リサーチと制作を行う

地域社会の分母としての文化をみんなで見出す

- ・祭り⇒地域経済を浮揚しうる観光産業の優良コンテンツ⇒
「商品」としての祭り⇒支えているのは市民のボランティアな力
- ・人々が疲弊することなく、祭りや芸能に参加する喜びと意義を感じ続ける
⇒継承につながる
- ・支えている市民力の価値を可視化し讀える機会⇒ほとんどない
- ・「地域の分母としての文化」の価値を、今、行政も市民も意識すべき

危機と文化

- ・文化は地域社会の分母として、根源的な地域基盤⇒危機的な状況に置かれた人間に、再生へのクリエイティブなアクションを起こさせる底堅い力をもたらす
- ・人間のしなやかな強さとレジリエンス力⇒経済合理性や利便性からは決して培われない
- ・文化⇒より困難な選択へと人を駆り立て、未来のために挑戦する気概を人の心に生み出す

地域の活力と魅力の源泉は“地域の文化”

- ・経済のうねりが地域文化を疲弊させてしまう危機を見極めつつ、まちのソフト

パワーと地域社会の分母を担う人づくりを意識し、地域に根ざした文化政策のあり方を考えたい

一般報告

標高差 1,500mの地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出

長野県東御市長 花岡利夫

文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展に向け

- ・平成30年に文化芸術行政とスポーツ行政を市長部局へ移管
⇒文化芸術・スポーツが生み出す魅力と発展に向け、振興政策の方向性を示すための「東御市スポーツ推進計画」と「東御市文化芸術推進計画」を策定

欠点を個性に

- ・平地が少ないことがまちの欠点
- ・標高差のあるまちの特徴⇒ワイン醸造⇒ワイン特区認定⇒14件のワイナリーがワイン醸造
- ・「高地トレーニング」

地域固有の価値を創出し最大限に活かす

- ・湯の丸高原⇒1,750mであり、個人差が出るのを避けられるギリギリの標高⇒GMOアスリートパーク湯の丸
- ・屋内プールは標高 1,735mに立地⇒50m×8レーン、水深2m、日本水泳連盟の公認規格、日本オリンピック委員会水泳競技強化センターに認定、
- ・付帯のトレーニングルーム⇒パワーリフト4台、さまざまなトレーニングマシンを設置

合言葉は「東御から世界へ」

- ・平井ヘッドコーチ⇒「東御の施設があったから大橋の金メダルがあった」
- ・東京2020オリンピック・パラリンピック⇒湯の丸の評価高まる⇒認知度は飛躍的に上がった
- ・東京、福岡（世界水泳選手権 2023 福岡大会）⇒パリオリンピックへ1つの市がつくった施設が水泳ニッポンの強化拠点となり、「東御から世界へ」は地元のみならず、これからの競泳ニッポンの合言葉になっている

むすびに

- ・「東御市」は、とあるアンケートで難読市ランキング1位⇒人口3万人弱の小さな自治体であり、そんな自治体があることすら知らない方が大半
- ・地域の欠点をそのまま欠点として捉えず⇒個性として認識⇒資源として活用⇒水泳関係者の中で知らない人はいないといっても過言ではない状況
- ・これからも、多くのアスリートが湯の丸でトレーニングを行い、国際的な競技力を向上させ、東御から世界へ向かう場所であり続けるとともに、将来的には湯の丸に医科学的なデータを集積させることで、市民の健康寿命の取り組みに還元できる場所にしていきたいと考えている

一般報告

まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効利用

株式会社鹿島アントラーズFC取締役副社長 鈴木秀樹

全国に広がるプロスポーツクラブ

- ・プロスポーツクラブには地元自治体、企業と連携しながら、まちづくりを推進していくポテンシャルがある
- ・鹿島アントラーズは発足30年の歩みから、まちづくりに関わることこそが地域に存在する意義であるという思想に至った

鹿島アントラーズと地域との深いつながり

- ・自治体、民間企業、アントラーズが一体となって地域の活性化、地域貢献を進めてきた
- ・自治体が出資団体として参画していることが特徴（株主でもある）
- ・5市（鹿嶋市、潮来市、神栖市、行方市、銚田市）の行政職員が1人ずつ1年交代でクラブに出向（派遣研修）
- ・新型コロナウイルス感染症の拡大でクラブは経営面で大きな打撃を受けた
⇒2020年からファン・サポーターからの寄付による支援を募っている
⇒ふるさと納税型のクラウドファンディング

鹿島アントラーズによる地域の社会課題解決

- ・2015年、カシマスタジアムに隣接する「アントラーズスポーツクリニック(ASC)」を設立し、アントラーズのチームドクターと理学療法士(PT)が整形外科医療、リハビリの高度なノウハウを地域に還元

- ・2006年、カシマスタジアム内にフィットネスクラブ「カシマウウェルネスプラザ」を開設⇒地域にスポーツジムがほとんどなかったゆえの取り組み
⇒ここでスタートした健康事業をASCでの医療事業に発展
- ・5市の教育委員会と手を携え、地域の教育事業にも力を入れている
- ・自治体がクラブの有する幅広いネットワークに目を向ける⇒地域における社旗課題解決の糸口が見えてくる
- ・地元のスポーツクラブ⇒地域を変える機能を備えた装置として捉える

プロスポーツクラブを有効に使い切る

- ・アントラーズはスタジアム来場者、ファン・サポーターを対象に定期的なアンケートを実施⇒最低でも2000件、多い時には4000件の回答がある
⇒アンケートの結果から、道路の渋滞、交通アクセス、宿泊施設、駐車場の問題など地域の抱える課題が浮かび上がる
- ・サッカーの試合以外にも夏場のビアガーデン、スタジアムキャンプ、スタジアム遠足、スタジアム運動会などを催し、新型コロナウイルス感染症拡大の際には、ドライブスルー形式で地域産品を販売するスタジアムマルシェを開催し、ワクチン接種会場ともした
- ・スタジアムや体育館はほとんどが公共施設
- ・自治体に望みたいのは、地域の貴重な資源であるプロスポーツクラブの有効活用⇒自治体だけではできないことが可能⇒社会課題を解決し、まちづくりを推進

パネルディスカッション

一巡した文化芸術を活用したまちづくり～自治体文化行政から魅力的なまちへ
 東京大学大学院人文社会系研究科教授 小林真理

はじめに～いま、改めて文化への注目

- ・これまで教育委員会で主に住民個人の学習や住民間のつながりの醸成に活用されてきた文化領域が、観光・まちづくりへと面的、空間的、境界を越えて展開されるようになってきている。既存の領域においては、批判的に受け止められることが多いように思われるが、そもそも文化にはそのような性質があるもの。
⇒ようやく文化の価値が広く認められ、不可欠な公共サービスとして再認識されるようになってきた

自治体文化行政の発展と展開

- ・自治体文化行政⇒経済的地盤沈下への対応へとつなげることが目的であり、同時に地域に目を向けた行政のあり方を提示した上で大きな意味をもつ

文化施設建設と運営の反省と転換

- ・2012年に「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」が制定されて以降、施設側の機能強化が行われてきた
 - ⇒地域の文化施設における文化事業の制作能力は向上
 - ⇒中央からパッケージでイベントを購入するのではなく、自ら公演事業やフェスティバルを制作するという流れ

まちづくりのコアとしての文化・文化施設

- ・1970年代後半から取り組まれた地方自治体の文化行政も、50年を経て1つ1つ課題を解決しながら、ようやく都市の魅力のコアとして展開するための足がかりをつかんだように見える

八戸の独自性が生み出してきたもの

合同会社 imajimu 代表取締役 今川和佳子

複雑な機能を持つ「はっち」の誕生

- ・2011年2月「はっち」がオープン
- ・「全国でも前例を見ない施設」と言われる⇒美術館でもない、公民館ともまた違う、複合的な機能を持つ施設⇒地域住民に不安と期待をもたらしているように当時は感じた
- ・「貸館事業」「自主事業」「会所場づくり事業」の3つのソフト事業軸を持つ
 - ⇒自主事業に関しては観光からアートまで、歴史・伝統をテーマにしたものから現代ものまで多岐にわたる⇒全体を貫いているのが、「八戸という地域を再発見する」という視点
- ・実践を通して市民に感じてもらおう。この姿勢が、はっちオープンまでの3年間に行った30ものプレ事業に凝縮

市民のマンパワーが人をつなぐ

- ・「はっち」の空間を自由に使いこなす市民の多さや、昼夜問わず館内のお気

- に入りの場所でくつろぐ老若男女、またアーティストの制作現場やフィールドワークなどの活動に積極的に参加する若者の存在などを目の当たりにして、それぞれに楽しんでもらえる場所として機能し始めていることを感じる
- ・開かれていく市民の活動の活発さに後押しされて、開館からちょうど1周年の日に、来館者 88 万 8,888 人を達成
 - ・「はっち」ができたことで中心街の通行量も前年比で 30%増、空き店舗に 32 事業所が開設するなど、「はっち」はまちへの波及効果をもたらした
 - ・「はっち」のプレ事業は、市民のマンパワーに支えられて、1つずつ形をなした⇒「はっち」という施設のイメージ像が地域の人々の間で立ち上がっていた
 - ・「酔っ払いに愛を〜横丁オンリーユーシアター〜」「デコトラヨイサー!」「はっち流騎馬打毬」などアーティストと市民、そして八戸ならではの文化をテーマに、それらを掛け合わせることで、無数の発見と人のつながりが生まれた
 - ・アーティストに引けを取らないくらい、参加する市民がユニークな視点を持っている
 - ・まだまだ八戸には面白い人が、文化が存在しているに違いない。その予感と期待は、今でも私を突き動かす原動力になっている

郷土芸能とアートの親和性

- ・夏の「八戸三社大祭」、冬の「八戸えんぶり」に代表されるような、長年にわたって脈々と受け継がれる郷土の祭りが存在
⇒今では八戸の観光の目玉としても注目され、年々訪れる人が増えているが、これらの祭りは多くの市民が支え応援する場でもある
- ・ここ 10 数年で複数の文化・スポーツの施設が整備された八戸
⇒今後いかにして地域に根付く「文化」と、市民のポジティブなエネルギーや創造力を引き出し続けることができるか。そのステージのスタートラインに、今まさに立っているように思う

地域スポーツにおけるスポーツの役割とその変化

拓殖大学商学部教授 松橋崇史

はじめに

- ・スポーツと地域社会の関係に関する議論は古くから存在⇒国内で、政策的な課題になった時期は、経済企画庁が「経済社会基本計画」の中で、「コミュニティ・スポーツの振興をうたった1970年代以降⇒組織経営的な課題となったのは1993年に開幕したJリーグの登場以降

地域活性化とトップスポーツクラブ

- ・プロクラブビジネスでJリーグの先を走っていたと思われていたプロ野球界も2000年代前半にいくつかの球団で経営不振が表面化し、それを克服する過程で「地域密着」を積極的に取り入れ、成功を収める球団が誕生

地域活性化とスポーツ政策

- ・2000年に発表されたスポーツ振興基本計画では、コミュニティ・スポーツの振興の系譜を組む総合型地域スポーツクラブの創設がうたわれ、2000年代を通して全国に普及
- ・プロクラブと自治体の連携も深化⇒北海道日本ハムファイターズの新スタジアム及び周辺開発は、球団と北広島市の強い協働体制によって可能となる

「全力」を可視化するスポーツ

- ・2000年代以降にインターネットの普及が進み、地域活性/地方創生が求められる中で、多くの地方都市でプロクラブの創設が可能になる⇒地方都市の活性化のアイコンとしてのプロクラブの増加は必然

多様性を体現するスポーツ

- ・変化するスポーツの特徴を捉えること、もしくは、スポーツに新たな価値を付与することを通じてスポーツを地域活性化に活かしていく視点が重要になる

スポーツとアニメを活用したにぎわいの創出 ～誇り高い沼津を目指して～

静岡県沼津市長 頼重秀一

スポーツを活かしたまちづくり

- ・Jリーグクラブ「アスルクラロ沼津」のホームスタジアムがある愛鷹恋息公園を

はじめ、「香陵アリーナ」フェンシング交流拠点施設「F3 BASE」といった多彩なスポーツ施設が点在

- ・フェンシングのまち沼津
- ・サイクリストフレンドリーエリア沼津
- ・プロスポーツが楽しめるまち沼津

アニメ『ラブライブ！サンシャイン！！』を活かしたまちづくり

- ・民間事業者が中心となり、商店街へのフラッグの掲出や、バス・タクシーのラッピング、特産品とのコラボレーション、地元旅館協同組合によるパズルラリーの開催
- ・行政は事業者等の取り組みを発信

おわりに

- ・スポーツ・アニメを通じ、地域資源の掘り起こしや沼津の魅力発信に取り組んで来た⇒おおくの方々に沼津へお越しいただき、その皆さんと市民との交流の輪が広がるとともに、新たな市民や企業間の交流が生まれ、多くのビジネスチャンスも創出

文化芸術・スポーツで紡ぐまち・綾部 —市民一人1文化・1スポーツの推進—
京都府綾部市長 山崎善也

市民一人1文化・1スポーツの推進

- ・2019年度に、文化芸術とスポーツの所管を教育委員会から市長部局（定住交流部）に移管⇒文化芸術やスポーツと地域づくりを一体的に推進する体制を構築

合唱のまち・綾部

- ・市の合唱のまち推進施策（指導者派遣、合唱祭参加支援）も相まって、多くの合唱グループが新たに生まれている
- ・1980年度から開催されている「綾部市民合唱祭」は、毎年12月に綾部市合唱連盟を主体に運営され、今では市を代表する文化のイベントの1つとして初冬の風物詩になっている

文化がかおるまち綾部

- ・入門から育成、発表、鑑賞を組み合わせた事業の推進を2024年度事業として実現すべく検討を進めている

豊かな自然を活かしたスポーツによるまちづくり

- ・2027年4月には、第1回あやべ水源の里トレイルランが開催され、市内外から約600人の参加

結びに

- ・文化芸術やスポーツの魅力や価値を最大限に活用することは、まさにそれを実現

できる「鍵」になると確信している

調査先（主な質疑・応答内容） / 研修（受講後の感想）

八戸市、東御市、沼津市、綾部市、の取り組み、鹿島アントラーズの地域と連携した取り組みなど参考になった。それぞれ地域の特徴を活かして文化芸術またはスポーツが持つ「都市活力を生み出す力」と、その力によってもたらせる「都市の魅力と発展につなげる方策」について学ぶことができた。ぜひ、本市の課題解決のための糸口としていきたい。

調査・研修の成果・考察

(瀬戸市への反映・自己の能力開発への寄与等)

開催市でもある八戸市の取り組みが特に印象に残った。すべては見学できなかったが、公共施設である新たな交流と創造の拠点「はっち」、八戸まちなか広場「マチニワ」、八戸市美術館は見学することができた。「はっち」は、地域資源の魅力創出・発信し、文化芸術、産業、観光、市民活動、子育て支援といった各施策を一体化した施設ということである。見学した時は、市民によるイベントが行われており、多くの人で混雑していた。建物自体は、空間が多く様々なイベントに対応できるようになっている。八戸美術館も美術館らしくない建物で、特に1階フロア「ジャイアントルーム」は空間も多く、新しい感覚の美術館という印象である。本市と異なり八戸市は、新しい施設を建設している。それがまちの魅力となり、市民力も相まってまちづくりが成功している。

一方、スポーツにも力を入れたまちづくりも行っている。特にスケートは、八戸の風土が育んだ文化ということであり、競技人口の裾野を広げることに継続的に取り組んでいる。また、地元サッカーチーム「ヴァンラーレ八戸FC」を有し、避難ビル機能を備えたサッカー専用スタジアムを市は整備できたのは、市民を巻き込んだ民間ベースによる力強い活動があつてのことである。アイスホッケー、バスケットボールもプロがあり、地元関係と八戸スポーツコミッションを立ち上げ、その活動を支援している。こういった取り組みをみても八戸市は、文化芸術、スポーツの両面でまちづくりを推進している先進的なまちであろう。

本市について考えてみると、陶磁器は産業であると同時に文化芸術でもある。また、最近是将棋のまちと書いていいほどになってきている。こういった資源をさらに活かしていかなければならない。また、スポーツにおいては、朝日インテック・ラブブリッジ名古屋のサッカーグラウンドが小学校跡地に整備される。ぜひ本市としても、市民を含め盛り上げていき、サッカークラブ連携したまちづくりを推進したいものである。

行程表

乗り換え案内ジョルダン <http://www.jorudan.co.jp/>

※往復利用の場合は、往復料金を入力してください。

日付	出発駅	交通手段	片道 / 往復	到着駅	距離		交通費		
							運賃	特急料金	等
5 年 10 月 11 日	瀬戸市役所前	名鉄	片道	大曽根	14.8	km	410	円	円
	大曽根	JR	片道	名古屋	9.8	km	12,540	円	円
	名古屋	新幹線	片道	東京	366	km		円	4,920 円
	東京	新幹線	片道	八戸	631.9	km		円	6,800 円
	八戸駅前	バス	片道	廿三日町	5.7	km	320	円	円
宿泊先名称					TEL		宿泊料金		
ホテルグローバルビュー八戸					0178-46-3111		11,550 円		
備考欄									

36,540 円

日付	出発駅	交通手段	片道 / 往復	到着駅	距離		交通費		
							運賃	特急料金	等
5 年 10 月 12 日	十三日町	バス	片道	市庁前	0.4	km	170	円	円
	市庁前	バス	片道	十六日町	0.4	km	170	円	円
						km		円	円
						km		円	円
						km		円	円
宿泊先名称					TEL		宿泊料金		
ホテルグローバルビュー八戸					0178-46-3111		11,550 円		
備考欄									

小計 11,890 円

日付	出発駅	交通手段	片道 / 往復	到着駅	距離		交通費		
							運賃	特急料金	等
5 年 10 月 13 日	十三日町	バス	片道	市庁前	0.4	km	170	円	円
	本八戸	JR	片道	八戸	5.5	km	12,870	円	6,800 円
	八戸	新幹線	片道	東京	631.9	km		円	5,120 円
	東京	新幹線	片道	名古屋	366	km		円	円
	名古屋	JR	片道	大曽根	9.8	km		円	円
	大曽根	名鉄	片道	瀬戸市役所前	14.8	km	410	円	円
備考欄									

パック等による割引など

小計 25,370 円

円

宿泊費 合計

交通費 合計

23,100 円

50,700 円

申請額合計
(宿泊費+交通費-割引代)

73,800 円